



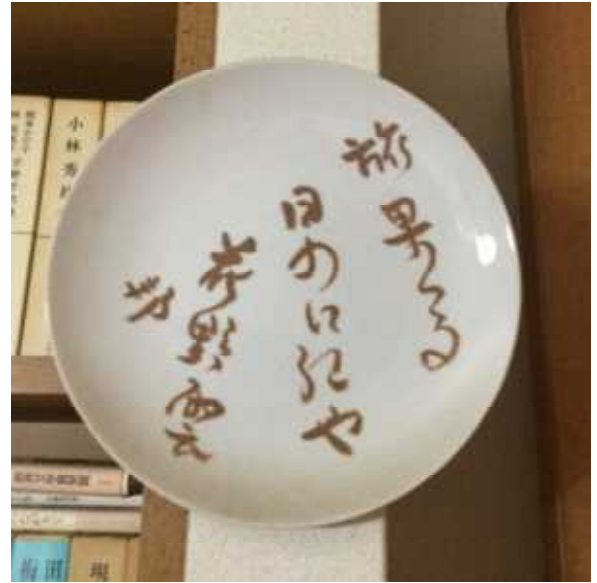
(新婚旅行にて)

詩と人生
「蝶と猫」
高野邦夫





詩集
『峡谷』
(装画は著者)



旅果つる
日の以りや
花野雲
(文字は著者)

目次

凡例

詩と人生「蝶と猫」

私の青春

略年譜

あとがき

130126123 3 1

凡例

一、この筆記記録は、昭和五十九年十月十四日に行われた講演会の私的な記録である。残念ながら、講演者による内容確認はできていない。

二、講演者の本意をできるだけ保存するため、常套的じょうとうてうな繰り返しや言い回しの癖等についても、原則的にはそのまま記録することに努めた。なお、明らかな言い間違いなどは修正している。

三、講演者が引用した詩歌しいかは、なるべく全文を掲げるようにした。

四、元号の扱いについては、講演者の詩集では西暦が使われ

ているが、本講演においては元号（昭和）を使用していることから、元号表記とした。

五、録音テープから作成したので、テープ交換等による中断があることを御容赦戴きたい。また聞き取りにくいところもあり、誤りや不足にお気づきの方は御一報賜れば幸甚です。

詩と人生「蝶と猫」

ただいまご紹介いただきましたかわさき詩人会議の高野です。本日、私は「詩と人生」と題しましていささか私の人生について話す機会を与えられました。川崎詩人会、川崎市教育委員会、かわさき詩人会議の皆さん、そして本日多数ご参集いただきました皆様に対して厚く御礼申し上げます。

唐突ではございますが、松尾芭蕉の言葉でございしますが、松尾芭蕉は俳句に關しまして「俳句とは夏炉冬扇かろとうせんの如きごとものである」と申しております。夏炉冬扇とは、夏の炉、冬の扇ということでございます。俳句は私たちの人生に對しまして、積極

的な関わりは持たないということであろうかと思えます。しかしながら、松尾芭蕉は、この夏炉冬扇である俳句に対して無芸無能にしてこの一筋につながるというふうにも申ししているわけでございます。

私は、本日「蝶と猫」と題しまして、その蝶と猫を作品に多く使ってまいったわけでございますが、そうした蝶と猫も夏炉冬扇の如きもの、積極的には関わりのないものというふうには考えられるのではないかなあ、と考えるわけでございますが、私もまた、芭蕉の意を体して、無芸無能、あるいは無芸大食でしようか、大飲でしようか、とにかく、無芸無能ながらも、この一筋につながることによって、詩によって、私の人生が今日まで鍛えられてきたようにも思えるわけでございます。

私は、現在、川崎市内の高等学校の定時制教員、一教員に過ぎません。詩的力というものも、先ほど植木さんからいろいろお話があったのでありますが、過褒かほうと申しますか、それほど力を持っているわけではございません。しかしながら、与えられたこの機会を充分生かすことができれば、とは存じておりますのでよろしくお願いしたいと思っております。先ほど、牧さんのメッセージを読んでいただいたのですけれど、だいぶ違いがありまして、訂正をしなければいけないのかなあと思うわけでありますが。

私は、昭和二十年八月十五日を京都府舞鶴の一小学校において迎えたわけでございます。海軍の軍人と申しますか、少年兵であったわけであります。私は、昭和十九年四月、当時在学し

ておりました神奈川県立工業学校電気科三年を修了いたしました。当時喧伝けんでんされておりました海軍甲種飛行予科練習生として、奈良県丹波市町、現在の天理市でございますが、そこにございました奈良海軍航空隊に入隊したわけでございます。その当時の家庭と申しますと、私の家では、昭和十五年父が死亡いたしました。当時、長兄はビルマ戦線、次兄はニューギニア戦線に従軍中ございました。その次兄はニューギニアにおいて、昭和十九年十二月、戦病死しております。飢餓あるいはマラリアのためではなかったかと考えるわけでございます。家庭は、姉たちも結婚いたしました。私と母と妹と三人ばかりの寂しい家庭であったと思われれます。奈良海軍航空隊から滋賀海軍航空隊に転属しまして、翌年二月には、予科練習生の練習生教程が

打ち切りになりました。飛行機にかけた夢はまったく断ち切られてしまったわけです。飛行機に乗らなくてよかったですけれども。それ以降、海軍の飛行場建設、土方作業というのでしようか、そういったことに従事いたしました。最後は舞鶴において海軍の陸戦隊というような形で、敗戦を迎えたわけでございます。

私は、昭和二十六年川崎市内中学校の教員に着任いたしました。それより約三十四年にわたる教師生活を続けているわけがあります。いつか誰かが、もはや戦後ではないというようなことを申したことを記憶しているわけでございますが、私にとつて、戦後というものは、今も私の精神内容を脅迫し、あるいは私自身の内心を苦しめる原因となっているわけでございます。

が、私にとつて、直接の戦後と申しますと、昭和二十年から二十六年にいたる六年間ではなかったかと、このように考えますので、一応、この六年間について少し詳しくお話し申し上げてみたいと思います。

私の人生、あるいは私の詩の原点、そういったようなものが、その六年間の中にあるのではないかと考えるわけでございます。簡単にその間の履歴を申し上げますと、復員してまいりましたより、昭和二十一年に日産重工業株式会社に入社いたしました。自動車修理工場に配せられまして、板金・熔接工、泥にまみれ酸素熔接とかフェンダーのたたき出しといったような仕事に従事して二年有余、退職時にはいっぱしの熟練工ではなかったかと、そのように考えるわけですが、昭和二十

三年同社を退社しまして、横浜市の小学校の助教諭、それから二十五年にはそこも退職しまして、二十六年までは夜学には行っていたのですけれども職業はなしということでもあります。

学歴は、先ほど申しましたように、復員時は神奈川工業三年修了というそれだけの学力でありまして、復学すればよかったのですけれども、復学しなかったために大学への進学希望が絶たれ、当時は悶々^{もんもん}と過ごしていたような次第です。昭和二十二年、日産重工業の社内におきまして、私立日産重工業青年学校なるものが再開されたわけでありまして、私には、その学校に入れる資格はなかったようではありますが、青年学校の生徒になったわけでありまして、その青年学校さえ卒業すれば、大学入学資格を獲得できると考えたわけでもあります。同じ頃であります

が、早稲田高等工学校という学校が早稲田大学の域内にありまして、後に早稲田大学理工学部に吸収された学校であります。しかしながら、一学期間だけで退学しまったということは、その時点において、私は、私の進むべき方向は電気あるいは工学には適していない、無能力であるということを認識し、私自身の進むべき方向として文学において進むことが適切であると考え、自分で自分を退校処分・放校処分にしてしまったわけであります。

青年学校を卒業しまして、私は日本大学高等師範部国語科なるところに入学したわけでございます。何しろ板金・熔接工でございましてから、私がそうした学校を選んだことにつきまして、周囲のものが大変奇異の目を持って迎えたことを記憶しております。

ます。日本大学入学と同時に、私は日本大学高等師範部在学・青年学校卒業という貧しい履歴を毛筆にしたため、単独、なんらの紹介者もなく横浜市教育委員会にまいりまして、小学校の教員志望を告げたわけであります。そして、小学校の助教諭になったわけであります。小学校の方は一年半ほどで、私のわがままから退職してしまいまして、家族が来ていますので具合が悪いのですが、以降は居直ってしまいまして、貧しい母から学資と定期代だけを与えられまして、一年有半にわたって大学に通ったわけでございます。ようやくにして卒業しまして教員になったという、こういったような経歴でございます。

簡単にその頃の読書経験について申し上げますと、私は紅顔の美少年というわけではありませんが、大変目立たない小柄な少年

ではなかったかと思うわけですが、読書に関しては異常な執着を持っていたように記憶しております。私の家には、幸いに、平凡社か何かからの発行だったと思いますが、大衆文学全集がありました。三十冊か四十冊ありまして、これを工業学校修了までに、全部大体において読了しております。小学校の頃でございしますが、読み物のないときには、兄とか姉の中等学校あるいは高等女学校の国語教科書を引っ張り出しまして、演劇とか小説とかを耽読たんどくしたというような経験もあります。また、工業学校二年の頃、『南総里見八犬伝』、これは滝沢馬琴の戯作でございしますが、岩波文庫から十分冊になって出ていました。これなどは読了しているわけでございます。

当時のことを考えてみると、私は私の中に文学的萌芽ほうがとも一

顧すべきものが萌もえ出ていたのではないかなというふうに考えるわけでありますが、当時は、そんなことをなんら意識することもなく、結局予科練に身を投じてしまうわけでございます。予科練に入隊していた期間、大体一年有半ゆうはんは、一切こういった書物に触れることはできなかったわけでございます。敗戦後、私は川崎に帰りまして、川崎の闇市、当時露天であります。その露天の中の古本屋から岩波文庫であるとか、明治大正文学全集、これは当時円本と呼ばれた書物であると思われませんが、そういうようなものを買って耽読たんどくしていたわけでございます。

これらを反省してみると、私の少年時代から十五歳に至るまでは、私の周囲の友人たちに比較し、読書量・読書経験は比較的豊かではなかったかと、こういうふうに考えられるわけであ

りますが、十五歳から二十歳に至るまでの読書経験というものは、まことに貧弱、あるときには絶無というようなことでございました。こうした貧しい読書経験ながら、とにかく、私は次第に文学への希望といったようなものをかき立てていったわけでありませう。将来は小説家になりたいだとか、詩人になりたいだとか、そういうような希望を心の中に持つようになったわけでございます。

どういうわけか、まったく何の因果か分からないけれども、小説家になるよりも、むしろ詩人になったほうが自分に適しているのであるというように判断してしまつたわけでございます。当時、詩人に対する印象というのは、私は何も分かりませんから、一般的な俗評から、詩人とは無頼漢ぶらいかんの如きものである、

とこのように、本日お集まりの皆様には大変失礼であります、そういつた印象を持っていたわけでございます。

しかしながら、その無頼漢の如き詩人に私はなりたいたいと思つたわけでございますが、私の世界は一切から隔絶されたような状況でございます。いったいどのような方法をもつて、どのような方途ほうとをもつて詩人に近づいていったらいいのか、それが全く分からなかつたわけでございます。それで当時は、中学校の国語科教員にでもなれば、詩の世界に一步近づくことができるのではないか、教員生活の中から詩を見出すことはできないのであろうか、ということを考えて教員の世界に身を投じるようになったわけでございます。大体こういつたようなことが読書経験としておきましよう。

このようにして一応、教員になったわけですが、昭和二十一年、二十二年頃の私の精神生活とでも言うようなものをお話してみようと思います。私は先ほど申しましたように、川崎の露天市を訪ね、小説類を尋ね、こういったものを買ってきたわけでございます。当時、私は激しい労働のために疲れを持っていたし、また飢餓感・空腹感にさいなまれつつ、軍隊で覚えたタバコを闇市で求め、あるいは南京豆をかじりかじり、ぶらぶら歩きながら、書店があるところとどまって書物を求める。それは、肉体的な疲労、肉体的な空腹とともに、はなはだしい精神的な飢餓感というようなものを覚えていたからだ、このように考えるわけであります。

冬の夜は、火鉢など火の気のない部屋において毛布に包まりながら読書をしていたというような、そういう生活でありましたが、そういう生活の中から、私はある日一つの言葉を与えられました。私は戦後のそうした時期を思い出すたびに、その字句を思い出すわけで、私は決して座右の銘として憶えておこうとしたわけではないけれども、なぜかその言葉を思い出すわけでございます。

「青年よ感激あれ。感激なき人生は空虚なり」

私はその言葉を思い出すたびに、かの北海道大学のクラーク博士が言った「少年よ、大志を抱け」を併せて思い出すわけでございますが、クラーク博士の言葉につきましては、明治の青

年はこの言葉によつて、立身出世の夢・経国の理想、この二つを抱いて学校を巣立っていったのかもしれない。けれども、私たち世代の者にとつては、あまりにも空々しいものに思えたわけであります。

戦前、私たちの人生は二十五年であると規定されていたが如くでして、戦後はこの荒唐の中において、この言葉を聞いても、私の中になんら感激が生まれなかったわけでありますが、先ほどの言葉「青年よ感激あれ。感激なき人生は空虚なり」という言葉に、私は深く刺激され、その持つている意味を深く追求していったわけでございます。その感激なき人生は空虚なりという空虚とは、一体何であろうか。それは、私自身の持つている精神の状態そのものを象徴的に表現するようなそういう一語で

はないか。そうして、空虚の反対とは一体何であろうか。それは充実ではなからうか。その充実が、私の中にはない。そしてさらに感激とは何か。感激とは情熱であり、あるいはパッションといわれるもの。そしてある対象によつて心の中に動くところの強い感動と考えたわけでありますが、私の中にはなんら感激の対象たる何物もない、ということを自覚せざるを得なかったわけであります。

感激の対象がないがゆえに、私の中に感激なく、感激なきがゆえに、私の精神は空虚である。空虚であるがゆえに、充実した生命活動を営むことができないのではないか。私は私の周囲、あるいは内面の中において感激の対象になる何ものかを求めたけれども、何ものをも発見することはできなかったわけであり

ます。私は現在詩を書いているわけですが、詩は生き物であります。しばしば私の手元から、あるいは胸先から逃れていくわけですが、そのとき私は深い空虚を感じる場合がございます。私の感激の対象であるそれは、果たして詩であつたのかどうか、私はしばしば考える場合がございます。

昭和二十一年か二十二年のことですが、私は新聞紙上において神奈川県立工業高校校長渡米というような記事を見たことがございます。教育視察団団長としてアメリカへ行くとのことでありました。その校長は、私の在学中のまさにその校長でもあつたわけであります。私はその校長を尊敬していたのではないかと思われるわけでありますが、その記事を見たとき私はその校長のかつての風貌・演説・行為・様々なものを思い

浮かべたわけでございます。そして、私も単純で若かつた。校長の真意というものは実際には知らないわけでございますが、そのことにつきまして、私はこのように判断してしまつたわけでございます。

あの学校長が、かつての学校長が今渡米するということは、私たち戦争中の在學生徒全体への背信行為ではないかと、このように若いながらに判断してしまつたわけでございます。そして、人間は信頼することはできないのだなあ、というような思いを抱いたわけでございます。戦後の荒廢した社会の中において、人間不信というものがすでに私の心の中に瀰漫びまんしていたわけでありませけれども、その人間不信の念は、その校長のかつての言行げんこうに背馳はいちしていち早くアメリカに！ ということの中か

ら非常に強い印象となって私の中に植え付けられてしまったと
考えられます。

人間は信ずることはできないのではないか。そして、人間が
信ずることはできないということは、同時に私自身を信頼する
ことができないのではないか。人間不信の念は、同時に私自身
の自己不信につながっていくのでありますが、そうした考え方は
は、現在も私の中にあつて私を苦しめているわけでございます。

しかしながら、考えてみますれば、人間が人間を信頼するこ
とができなくて、どうして生きてゆくことができましょうか。
あるいは、自己が自己を信頼することができなくて、いかに自
己を全うまっとうすることができましようか。私は私の中に人間不信
の念あるがゆえに、人間を信頼したい。少なくとも、人間を信

頼できないと感じたときも、なおかつ人間を信頼しているとい
う態度だけは崩したくない、というふうに考えているわけでご
ざいます。

しかしながら、このことは私の中に甚はなはだしい断層の如きも
の、あるいは亀裂の如きものを生まざるを得ないわけでありま
す。私は私の詩がそうした亀裂の中から、あるいは断層の中か
ら湧いてくるところの青白い閃光の如きもの、あるいは燐光りんこうの如
きものではないかと、しばしばそのように考えていることがあ
ります。

私が中学校の教員になるときでございます。私に対する面接
官はこんなことを言ったわけであります。その面接官は何らか
の悪意を持っていたのではない、むしろ私のために、励ましの

言葉として言ってくれたと思うのでありますが、その言葉に、私は甚だしい怒りとも言うべきものを感じたわけでもあります。それはどういふ言葉かというと、「君は採用する。ともかく採用するが、君ら世代は勉強していないからなあ」といふふうな一言であつたわけでありませぬ。

なるほど、私たちの世代は勉強できなかった。私たちは教科書を取り上げられ、また教育を受けるべき時間を奪われた。そういうことは戦争中でありませぬから、許されるべきと考えられるかもしれないが、しかしそれを現代の言葉で言うならば、私たちは国家社会において、私たちの教育権を完全に剝奪されたのだと、私は考えざるを得ない。私たちはそうした教育の結果として、私たちの中に人間的な歪み^{ゆがみ}、あるいは知識の偏り^{かたよ}、

そういうものを感じざるを得ないわけではありますが、そういう原因の中から、私の中に国家社会への不信の念が生まれたとしたならば、そればかりではありませんが、そういうところの一つの原因があるのであるのではないかと考えるわけでもあります。そしてこのことは、私自身が先ほど言いましたような自己不信・人間不信にあい通じるものであります。そしてさらに甚だしく強固な性質となつて、これもまた私を苦しめる一つの原因になつてゐるのではないかというふうにも考えるわけでもあります。

ところで、先ほど言いました面接官の言葉「君ら世代は勉強してゐないからなあ」といふ、これは彼には発言すべき権利というものを持つていないと、そのとき判断したわけです。彼はおそらく教員だつたであろう戦時中、私たちの背後にあつて、

積極的・消極的な姿勢はともかくとして、私たちに対して督励とくれいしたり鞭を与えたりした。もしくは、慰めの言葉を与えてくれたかもしれないけれども、とにかく、その面接官、もしくは、教員にはそう言う資格はない。それを言うならば、私たち自身が、私たち自身の言葉として言ったときにはじめて力を持つ価値ある言葉ではなからうか。すなわち、我々は教科書を奪われ、勉強の機会を与えられなかった。だから私たちは勉強しなければならぬ。このように言ったとき、初めて価値ある言葉として生きてくるのではないか。私はそのときにそのように考えたわけでありませう。

私はわたしの人生を通して私自身が、そういう教育の結果ばかりではないにしても、そういう教育の結果としてある歪みを

持ち、また著しい偏りを持つということ、自覚せざるを得なかったのであります。私はそういう自分を自覚し、それを幾度か矯正しようと努めたわけでございます。

たとえていうならば、二十代過ぎてから中学生と一緒に英語塾に通ったり、卒業はしなかったけれども、大学の哲学科を通じて信教育で勉強したというようなこともあったわけでございますが、途中でそれら一切の努力を放棄してしまっただけでございます。要するに、私の努力が足りなかったのか、もしくは才能がなかったのか、とにかく、私はそういった一切の努力を放棄して、このまま偏った人格、あるいは偏った知識、それをもって私の一生を過ごしてしまえと、そのまま突っ走ってしまえと考えたわけでございます。そうしてその結果、何ものかを得ら

れるのならよし、何ものをも得られなければ、それもまた仕方がない。それは俺の責任じゃあねえよ、と居直ってしまったという事です。

このようにして、私は戦後の生活を送ったわけでありませう。昭和二十一、二十二、二十三年、そうした年月の中に、私は絶望、絶望というような言葉を口の中につぶやきながら、巷ちまたを彷徨ほうこうしたわけでございます。そしてまたある時には、自分の前に「ああ、また崩壊感覚が来る。崩壊感覚が来る」というようなつぶやきをもつて、闇の中にとたみ動くことができなかつたことを記憶しているわけでありませう。崩壊感覚というのは、私の前に塔の如きもの、あるいは高層ビル如きもの、そういうものが存在していて、それらが何らかの理由で、ある時には理

由もなく崩壊してくるということでありまして、私はその瓦礫がれきの下にあつて、苦しみあえぎ脱出しようと試みるけれど、脱出することはできない、というような、そういう内部生命における感覚とでもいうべきものであつたわけでありませう。

私はその崩壊感覚なるものをそのように感じながら、それが一体、本質的には何であるかということは、知ることはできなかったかと思ひます。昭和三十年代になつて、あの時感じた崩壊感覚なるものは、一体何であろうかというふうに考えたときに、私は一つの結論として、ああ、あれはこういうことではなかつたのではなからうかと、自分の崩壊感覚なるものを解釈したわけでありませう。

崩壊感覚とは、もちろん私の精神内部の崩壊であつたわけで

はございます。しかし、同時にそれは私の内部生命を支えている骨格とも思われるもの、それは言語系統あるいは言語感覚、そうしたものの一切が、私の内部生命において崩れ去るといふことではなかったかと、と私はその時解釈したわけでありませう。私たちの子供の時代はいろいろなことがありまして、たとえば読本に、「知識ヲ飼ヒ国力ヲ養ヒ、以テ国家隆昌ノ機運ヲ永世ニ維持セントス。任タルヤ極テ重ク道タル甚ダ遠シ。而テ、ソノ任、実ニ懸カリテ汝ラ青少年学府双肩ニアリ」という青少年学府に賜りたる勅語というようなものがありません。また、神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝霊、孝元、崇神というような、これは歴代天皇の諡おくりなでした。さらに、私たちの前には、教育勅語があつたわけでありませう。

教育ニ関スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト
深厚ナリ
我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美
ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ
存ス

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ
啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ
重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮

ノ皇運ヲ扶翼スヘシ
是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾
祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖祖宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ
遵守スヘキ所
之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之中外ニ施シテ悖ラス朕爾
臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日
御名御璽

誤った教育勅語だというように私には考えられるわけであり

ますが、その誤りとは、教育勅語の中に挙げられているところの一つ一つの徳目を言っているのではないのでありまして、教育勅語の中における言語表現そのものに誤りがあったということとであります。それは、戦後いち早く国語学者によって指摘されているところでありますが、どういふことかという点、教育勅語の中の一節に、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」（一旦緩急あれば義勇公に奉じ）とあるわけではありますが、これが言語的には誤りであるということとあります。

この教育勅語は、もちろん文語表現ですから、一旦緩急あれば、というのは文法的には已然形という形です。ありますので、口語訳するときには、一旦緩急、戦争と思われれますが、いったん戦争があるので、というように口語訳されるわけです。雨降

れば、というのは文語では雨が降るのでという意味になるわけです。したがって、この表現は、緩急アラハ（あらば）、と未然形をもって表現しなければならぬということでもあります。

これは私が言っているのではなくして、国語学者が言っていることであります。教育勅語の中にこのような未然形でアラハ（あらば）と表現し、いったん戦争があつたならばお前たちは義勇をもって公に奉仕しなければならぬ、と言うべきところを、いったん戦争があるので：というように口語訳せざるを得ないような表現をしているということは、誤りであるといわざるを得ないわけであります。

起草者はこのことを、詔勅があつた後に気づいたが、訂正することができなかつたということでもあります。識者はもちろん、

それを知っていたでありましょうけれども、決して語らず。私たちはその誤った教育勅語を、小学校あるいは中学校の校長が勅語奉読といひますと、頭こゝべを垂れて聞き、微動だにすればたちまち激しい鞭を持って叱責された、ということであつたわけであります。

かかる教育勅語は、私たちも、私たちばかりでなく、日本国民に対して偉大な絶対的な力を持つていたわけであり、これを訂正することができなかったということは、天皇は神である、神は絶対者であり、絶対者は間違いを犯さない、絶対者が間違いを犯しても白を黒とも言いくるめても、それを押し通さなければならぬということでありました。それを私たちは何十年にわたって押し付けられていたということでもあつたわけであ

ります。

そのほか私たちが知っている言葉の中にはいろいろありまして、たとえば、「義は大岩より重く死は鴻毛こうもうより軽し」命は鳥の羽の毛よりも軽い。個人の生命は地球よりも重いなどと現在を言っておりますが、私たちにとっては生命は鳥の羽よりも軽かったわけです。あるいは、「武士道とは死ぬことと見つけたら」というような『葉隠はかくれ』の言葉であるとか、そしてまた尋常小学校国語読本、最近新聞のコラムに、あるいはしばしば復刻版の広告が出ておりますが、私たちは、「サイタサイタサクラガサイタ」という教科書から始まったわけです。これが小学校の一年生です。サイタサイタサクラガサイタ。

私はこの言葉を思い出すたびに、ああ何と美しい単純で素朴で素直な言葉ではないかと、今も感嘆するのですが、「花は散り際ぎわ人は武士」であります。「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜かな」そして、ページをめくってみれば、「ススメスメヘイタイススメ」ということであります。「ヒグチゴヘイハシンデモラツパヲハナシマセンデシタ」これが修身の教科書でした。

一連の教科書の中に出てきておりますのは、天皇に対する忠義、あるいは責任ということでありました。かくて私たちの生活は、八紘はっこう一宇いちうから始まって、大東亜共栄圏に、さらに、戦局たけなわ窮迫を告げるに至っては、「欲しがりません勝つまでは」これはまだいいと思うわけですが、「米英におかわいそうはあるものか」という標語に至っては、今思い起こして

も白けざるを得ないような、そういう言葉、言葉によって、私
たちは私たちの精神全体を動きの取れないような緊縛された状
態にされたわけでありまして、私が先ほど言いました崩壊感覚
とはこのような言語系統によって支えられている私の全精神の
崩壊、このことを指すのでした。しかも、小学校一年よりその
ような教育を受けたということは、崩壊の後は何も残すことは
なかった、できなかったということでもあります。何ものもない
という空白状態、それは先ほど申し上げたように誤った歴史観
・誤った思想・封建時代の遺習、単なる人間憎悪ぞうおの標語といっ
た言葉で支えられた精神が崩壊したということでもあります。

私は戦後数多くの戦没学徒の手記というものを手にし、読む
機会がありました。そして私と四歳から五歳程度しか違わない

その学徒出征に出したあの大学生と私の精神との懸隔、相離れ
た甚だしさに私は一驚したわけでありまして。戦没学徒たちは生
前すでに生命、すなわち生きるということについて関係し、あ
るものは職業的なもくと目途を持って生きていたわけでありまして。と
にかく、彼らはそういうものを持っていなかっただとしても、生
について悲しみ苦しみ、その中から何ものか生きるべき道を模
索しているわけでありまして、戦局急となり、彼らは死を目前
にするわけでありまして。彼らは死の意義を尋ね、ある者は死の
意義を確認したと言い、ある者は死生を超越したと言い、ある
者は死の意味をとらえることができなままに死んでいったわ
けでございませう。彼らの死はまことに悲しむべきことではあり
ますが、彼らはとにかく悩み苦しみながら死んでいった。少な

くとも、戦線に赴いた。しかし、私は何らの迷いを持つこともなく、とにかく戦場に赴こうとしたわけでありませう。

私は、私についての生というものに何ら疑問を抱かなかつた。それは、いまだ十五歳でありますから、生を探求するという、そういう年齢には達してはいなかつた。生の探求を志さない者がどうして死の意義を考へることがありましようか。私たちは何ら死を一つの意義としてとらへることもなく、命じられるがままに死線の世界に身を投じようとしたわけでございます。もちろん、その際における肉体的……（テープ中断）……、死線に赴かんとするや、死の意味をも極めようとし、極めることができなかつた。とにかくそのように死の意味について書き、そして実際に死線の境に彷徨し、それをくぐり抜けてきた兵た

ちだったのであります。彼らは戦友たち学友たちから死に遅れたということ、ある人は自分の人生は余生に過ぎないと言つていたかもしれな。しかしながら、彼らの持つていた生命力はたちまちにして、戦後世界において華々しい活躍をし始めるわけでありました。たとえば、詩の世界における「荒地」の人々という人たちの一群は、そういうようなものではなかつたかと私は考へるわけでありませう。

しかしながら、私の精神は空白であります。彼らがそのような華々しい活躍をする、そして彼らの活動は彼ら自身にとつて苦渋に満ちた苦しいものであつたかもしれな、しかしながら、私はそのようなところに目をつけることができなくて、単に彼らの活躍を表面的に見つめ、そうしてただ単に羨望するのみの

存在に過ぎないと思われず。彼らの死を、もし私が理解することができるようになったとするならば、それは彼らが活躍する時代・年齢に私自身が育ち、あるいはそれ以上の年齢に達してはじめて、ある程度理解ができたのではないか。このように考えるわけでありす。それは、先ほどから申し込んでいるように、私の精神というものは言語系統の崩壊によって空白である。その空白の中から戦後の中に生きてゆかなければならなかったということに原因しているのではなかったかと思ひます。

私は私のことを考えるに、私の少年時代には反抗期なるものがなかったような気が致すわけでございます。反抗期なくして成人したものは、幼児性のままに成長すると言われてるわけでありす。私は、その反抗期なるものが二十歳前後において

ようやくにして芽生えてきたようでありす。しかしながら、私は一体何に対して反抗したらいいのか。社会は崩壊し、私の周囲には権威というものは、実際にはあつたと思われるわけですが、私は孤独であり、また隔離され、自分で自分を隔離したような精神状態であつたがゆえに、私は反逆の目標を失つてしまつたように考えたのです。

しかし、反抗期は反抗しなければなりません。私は私自身の空白の精神、あるいは私自身の存在に対して反逆していったようです。そうして、私自身も、自虐的に生きることによつて、その中において、私は私の道、あるいは私個人の間人間というよなものを追求めていったように考えられるわけでありす。

しかし、私の周囲は地獄の相を呈している戦後でありました

し、また私の内面は空白であると同時に、地獄・修羅しゅらの相を呈していたように考えられるわけであります。地獄の中において生きる。これは甚だしい矛盾でありまして、針の山を脱せんとすれば再び針の山において全身を貫かれねばならないし、血の池を脱せんとすれば血の池に引き戻されるということであります。

私は結局、爆弾を抱えざるを得なかったわけであります。火炎瓶であったならば、華々しいのでありますが、私は爆弾を抱いていたわけであります。カストリ焼しょうちゅう 酎ちゅうであるとか、どぶろくであるとか、上澄みであるとか、当時の悪酒の例がたくさん頭に浮かんでくるわけであります。そうした悪酒を私は痛飲と称しておりました。あおりあおり飲んだわけでございます、

その結果、私は甚だしい失敗、失敗を繰り返してしまったわけでございますが、しかしながら、私はいくら失敗しても、その失敗に対して後悔というものを感じなかったわけであります。

もちろん、その後に来る失敗というもの、それに対する恐怖というものはあるにもかかわらず、私はなお、私自身が奈落ならくの底に至るならば、奈落の底に至れよと私を投じてしまったように思われるわけであります。そうして、奈落の底に至って私が死んでしまうならばそれもよし、もし奈落の底から何ものかをつかみ取ることができれば幸いである、というようななかなか望みを抱いて、私はそのような世界に住んでいたように思うわけであります。

私は先ほど、詩人とは無頼漢の如きものではないかと、こう

いうふうに申したわけですが、私は詩人になることはできなくして、詩人の属性の如きものであるという無頼漢と紙一重のところにとどまつて、ようやく教員になったというわけでございます。私はある日、菱山修三ひしやましゆうぞうなる詩人の次のような言葉を読んで、ああ俺と同じような人間がいるのだなあ、大変喜んだわけでございます。

夜明け 菱山修三 (昭和六年 詩集「懸崖」の中的一篇)

私は遅刻する。世の中の鐘がなつてしまったあとで、私は到着する。私は既に負傷してゐる。

という、こういう作品であります。なんとまあ俺に似ている

ことだろうというふうに考えたわけですが、この作品が昭和六年であるということを知るに及んで、ああこれは全く遅刻者の遅刻者であると、苦笑いせずにはいられなかったというところでございます。このようにして、ようやく教師生活に入るわけでございます。

. (休憩)

私は昭和二十六年に市内の中学校の教員としてようやく赴任したわけでございます。教員となった当時は、教員になったことに対して、それほど喜びを持っていなかったように感じるわけでありませう。何しろ、文学を志望しているというような自分

の気持ちがあつた上に、すでに一年有半の助教諭ではありましたが、わたしは教員にしかねなかつたのにもかかわらず、あたたかも教員にでもなろうかというような余裕ある態度を持つていたのであるという錯覚に陥っているのではないかということを感じるのであります。そうして、しばしば教師であるということについて、知識の切り売りではないかという、私自身、内部においてつぶやいていたということを記憶しているわけでございます。

しかしながら、そういう言葉に対する反省はじきにまいったわけでありまして、私自身の内部に切り売りできるような知識の堆積たいせきがあればいいのでありますけれども、そういうようなものが私の中に皆無に近いのではないかというような自覚がただちにまいったわけでございます。もし私の中に切り売りすべき知識がないにもかかわらず、教師は知識の切り売りであるということも申しているならば、精神的な意味では詐欺であり、精神的な罪悪ではないかというような反省を、私は持ったわけでございます。

これをいうならば、夏目漱石のような学者から言えば、あるいは世間はその言葉を一つの価値として認めてくれるかもしれないけれども、一般の教諭、あるいは私のような若輩じやくはいがそう

いうことを言うこと自体の中に、教師自身が自身を誤認しているというような反省を持ったわけでありませう。

しかしながら、もつと根本的な反省は、私が詩を志望している、そういうことの中から生まれてきたと私は考えております。先ほども言いましたように、私の印象のなかに、詩人は無頼漢タイプであるとか、あるいはそれに類するような印象があったことは事実であります。しかしながら、よくよく考えてみると、詩人というのはなぜ自分自身が無頼漢と考えているのになぜ詩を書くのか。あるいは、侮蔑の言葉をもって迎えているならば、それをもってしてもなお詩を書くということは、一体どういうことであろうかということでもあります。

世間が無頼漢であるといい、あるいは自分もそのように思いつながら、なおかつ詩を書くということは、詩それ自身の中にそれだけの力、それだけの魅力というようなものが内在しているのではなからうか。そうしてまた、詩人が、自分が無頼漢であるとして自称しながらも詩を書くということは、無頼漢であるという絶望的な境地においてもなお、それを乗り越えて詩を書くというような、そういう絶対的な生命力を持っているもの、それが譬え上の謂いではないか、こんなふうに考えていったわけでありませう。結局は、人はそのように考えてみれば、その無頼漢というような印象とは全く裏腹に、詩人なら詩人の持っている全身的、あるいは全人格的な形を持って書かなければならない。そのようにして書いた詩だけが価値があるのではないかと、このようにも考えたわけでありませう。

もし私が詩人を志望するならば、自分の全人間的、あるいは全人格的な力をもつて、詩に立ち向かうべきである。それが当然である、そのように考えるわけではありません。けれども、悲しいかな、私はそれでは生活ができないのである。あるいは、もっと根本的には、私自身、それだけの才能、力というものがないということを見せざるを得なかったわけであり、そのように考えた結果、結局私は、全人格的であり、あるいは全人間的な努力というふうにもかかわらず、全人格的、全人間的な努力を言う者が、詩を対象からはずしてしまふ、空白になってしまったわけであり、空になります。

私は結局、その全人的、人格的な努力、もしそういうものがあるならば、それは私の従事している教育の中においてそれを発

揮するよりほかに道はないのだ、というふうには覚悟せざるを得なかったわけであり、そして、もし私が本当にそのように教育に力を傾けるなら、詩は私から遠ざかっていくであろうことも、予期せざるを得なかったわけであり、空になります。

ランボーであるとかヴェルレーヌであるとか西洋の詩人たちは知らず、たとえば樋口一葉は二十四歳で病死し、石川啄木たくぼくは二十七歳、宮沢賢治は三十七歳、詩人は、天才は若くして花を咲かせて、そして彼らは病氣のために死んでいったわけであり、ますけれども、彼らには天才であるがゆえに、そのようにして詩を若くして花咲かせるだけの力、文学史の一ページに名を残せるだけの力を持っていただけであり、残念ながら、私には天才などというものはなくして、むしろ愚物・鈍物である

ということを自覚せざるを得なかったわけでありませう。そして私は結局、教育のなかに力を尽くすべきである、そうして教育の中に自分の力を尽くすということにおいて生まれてくるかもしれない私自身の人間、私自身の知恵、そうしたものはるか彼方において、もしそうしたものが生まれるならば、それに賭けるより仕方がない。愚かなる者は、私の如きものは、そうした迂遠うえんなる遠回り道をした結果、詩が生まれるならば生まれるであろう。もしそのようなにして生まれなければ、それはそれだけの人間に過ぎないのではないか、そのときはあきらめざるを得ない。ともかく、私は詩に傾けるべき努力というものを強力に傾けて、その中から生まれてくるものがあるならば生まれるであろうというような、詩に対して、はるかなる、はるか

る遠い回り道の中において、生まれるならば生まれるということとを理解したわけでありませう。

ようやく私は、教育者として自覚を持つようになったわけでございますが、勿論もちろん、私が現在までそのように力を尽くしてきたというわけではなく、そのときに考えた四分の一、あるいは三分の一、もつともつと少ないかもしれませんが、その程度にか実際には自分の力を尽くさなかったであろうということは、反省せざるを得ないわけではあります。その当時、そのような考え方を持ったということは事実であると思います。そうして、私は一応は教育者としての自覚を持って教育について考える、そうして児童心理であるとか青年心理であるとか、そういうものを読めば、もちろん良かったわけでありませうが、私は単

純な人間であるから、ただ単に教育というただ二字についてだけ考えていきました。

教育とは一体なんだということでもあります。教育とは教えることだ。生徒に教えることだと、これだけではあまりにも皮相なとらえ方でありまして、教育とは教え育てることだ。教育の育とは育てるという意味があるのではないかという。こう考えたわけでありますが、どうもこれでもまだ足りないわけでありません。そこで、その教育の字についてさらに考えてみると、教えるということに対して、その教えるという能動形に対して、受動形たる教えられる、そういう言葉が考えられる。教える教えられる。ここに教師と生徒の関係が樹立されるわけでもあります。それならば、育てるとという言葉についてはどうであるか。育

てるとは他動詞であります。それに対応する言葉は、育つという言葉であります。育てる。育つ。この言葉を考えてみると、どうも教育の教の場合の教える教えられるという生徒と先生とというような関係は成立しないということなのであります。育てるという力に対して育つということは、教師の力ではなくして生徒自身の、その生徒自身が持っている生命の力そのものでありまして、育てると育つという言葉の間には、どうしても断絶があるわけでありません。

そこで考えてみるに、教育とは、本当は、育てる育つ、この言葉の断絶を乗り越えて教師が育つ生徒の生命自身に着目していくときに限って、教育は成立するのではないか。そのときにはじめて教える教えられるという立場が分類できるのではない

か。私はこんなふうに考えていったわけでありませう。そうして、もし私とその育つ育てる、この言葉の断絶を乗り越えて、生徒自身の生命に触れることができるならば、私は生徒自身が持っている純真純白なそういう精神に私自身も洗われるであろう。私自身もその中であつて成長していくであろう。そういうふうに考えたわけでありませう。

生徒が育つということは、同時に私自身が育つということである。教える教えられる。教えることはよく教えられるというようない方をします。教える。数学を教えることによつて、教えること自体の中に数学の内面を正確に把握することができ、ということでもありますけれども、これではまだ教育技術的な末端に過ぎないものではなからうか。生徒自身の生命によつ

て教えられる。そして、教師自身もその中であつて育つてゆくという教育の本質があるのではなからうか、という部分に私は教育に対して考えていったわけでありませう。

勿論、先ほど申したように、だからお前の行動はどうだったか、というふうにとられると甚だ困惑してしまふわけでございませうけれども、ともかくそのような考え方をもち、私は生徒が成長するよりも、生徒によつて私自身が成長していくことに、より期待をかけるというような、見方によつては、教師が抱つてを期待したかもしれないと思ふかもしれないのであります。

ともかくその様にして、私は教育の中に道を尽くそうと思ひ、そして詩としては迂遠なるはるかなる世界において、詩というものが私のなかに訪れるようになればいいのだという期待をも

って、教育の中に自分を没入していこうとしたわけでありませう。ところで、私は国語科の教員でございます。国語科の教員である以上、国語科の教員として教科書に出てくる詩、教材ですね、こういうものも扱わなければならないわけでありませう。この話をするに当たって、そういうことも話したらどうかというようなことで、一応、詩の創作というふうなことについて指導した過去の教員生活を思い出しながら、そのことを簡単にまとめましたので、そのことをお話しさせていただきたいと思いません。

私は詩をどういうふうに説明していったかということですが、私は詩を散文と詩、これを対比することによって説明していったわけでありませう。小説であるとか、物語であるとか、

そういわれるところの散文、それをあるものに仕立ててたとえてみたわけでございます。それを海水というふうなものにたとえてみますと、有機物あるいは無機物混合体の海水を蒸発することによって塩が生まれてくる。海水のエキスであるその塩が詩そのものではないか。こんなふうに言ったわけでありませう。さらに私たちの人生・生活というものを散文的な人生と規定するならば、これも海水にたとえてみるならば、それを蒸発することによって得られる塩、すなわち詩に匹敵するものは何かというふうに考えられるならば、そこに感動というものが生まれるわけでありませう。

こうして詩は常に知と感動というものとの結びつきの中から生まれるということでありませう。そして私は、たとえばここに

ある石竹せきちくの花を指して花の客観的な存在・絶対的な存在といったものを認めた上で、感情・喜怒哀楽の上をもってこの花を見つめるならば、この花は、ある時は目標であり、ある時には模様であり、ある時美しく、ある時は極論すれば醜くも見える場合があるわけであります。人はそのような感動の動きによって、客観自体をとらえていくものではないかというふうには、生徒に対して説明していったわけでございます。さらに私がそういうような見方でもって、たとえば教室で、たとえば校庭で、対象を自分自身の感動を意識しながら、しかも客観的な存在である対象をとらえるように指導していきまして、そしてそれを黒板に表現させる、短詩を書かせたわけでございます。それを生徒と一緒に推敲し、私の作業はその場合に海水を蒸発するがご

とく無駄な表現を削除するというところに力を注いだわけでございます。もちろん変換しなければならない言葉もあつたわけでございます。こうして、私は生徒一人一人の詩を集めました、学級の詩集というようなものを作ったわけでございます。

もちろん中学校でございますから、各担任教諭の協力を得なければならぬわけでございますが、生徒たちはそのような作業を喜んでしてくれたように思うわけでございます。最近のことで余談でございますが、無着むちやく成恭せいきゆうの著書の中にへそのうた、あるいはへその詩というような著書がございます。私は興味をもって見たわけでございます。彼の、詩を創作することによる教育というような内容でございます。一つ一つの生徒たちの作品が載っていたわけでございますが、その作品を感心して

読んだわけですが、待てよ、俺が出していた、生徒たちが出していた作品にも、これに匹敵するような作品が随分あったはずであると思っただけでございます。

今でも保存してあれば、このくらいは作れるかなあとということも思ったわけですが、私は先ほど申し上げましたような遅刻してきた青年でありまして、コロンブスの卵というようにも考えられるわけでございます。このような教育を教室の中において、詩の創作指導というようなことをしてきたわけでございます。ついでに詩についてもう少しお話したいと思いません。

私が詩について語るのは、いささか僭越せんえつと考えるわけですが、本日ここにご参加いただいた幸さいわい文学歴史同好

会なる会合がございまして、この四月に私の『川崎』という詩集について話すことがございまして、その時に詩について話せということ、結局まとめていったのですけれど、時間に追われてそのようなことはできなかつたのでございますが、そのときの案稿を補強して、一応お話しさせていただきたく思います。私は国語科の教員でございまして、短歌教材の若山牧水の幾山河という歌がありますが、それを題材にして話していけば大変わかりやすく理解いただけるのではないかと考えたわけでございます。

幾山河越えさり行かば寂しさの果てなん国ぞ今日も旅行く

この歌はご存知のように、カールブツセの詩「山のあなた」からの翻案であります。

山のあなた

カールブツセ 上田敏訳

やまのあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ。

噫、われひとゝ尋めゆきて、

涙さしぐみ、かへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

という、一頃歌うたやっこ 奴やつこという落語家がこの詩を利用して大変儲けたという話がある詩でございますが、この詩のもっている浪漫性あるいは感傷性、それは広く私たちに浸透し今もよく歌われているわけでございますが、このカールブツセなる人の詩にはいかに浪漫性・感傷性というようなものが満ちていたとしても、この詩の中から詩人の態度というようなものはとらえることはできないと私は思います。

「噫、われ人と尋めゆきて、／涙さしぐみ、かへりきぬ。」要するに、人と尋めゆき、尋ねて行って涙をさしぐみながら帰って来ては、これは詩人ではないのであります。「山のあなたの空遠く／「幸」住むと人の言ふ。」懂れはかつてはそれだけで詩の題材になった時代があつたかもしれないが、それは現代に

はなかなか通用しないと考えられるわけでございます。

牧水はこの点をよく承知しておりました。「寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅行く」というふうには、旅行く、帰りゆく帰ってきたのではなくして、今日も旅行くとこのように言っているところに、牧水の歌たるゆえんがあるのでございます。牧水の歌について考えるならば、幾山河を越え去ってきたところの過去、苦しい道程であります。そして、その過去を起点として現在、その現在において過去を省み、そして未来を標榜する。未来は寂しさの果てなむ国ぞ、理想の国・永遠久遠くおんなる世界を目指して歩んで行こうとするわけでございますけれども、それを「今日も旅行く」と表現しているわけでございます。そうして「寂しさの果てなむ国ぞ」というふうには強く詠嘆しているわけであ

りますが、その詠嘆というのは牧水のあくなき永遠の世界を望んだときの絶望ではないか、私はこのように考えざるを得ないわけでございます。そうしてそれは単なる絶望ではなくして、同時に絶望を乗り越えてまた今日も旅行くというふうな決意、また希望、そうした複雑な心境を伴った詠嘆ではないかと、こういうふう考えるわけであります。

そしてこのように考えていったときに、牧水の詩の中には三つの関連があると考えられます。それは「理想」、寂しさの果てなむ国ぞという理想と、幾山河であり今日も旅行くという「現実」であり、現実から理想へ、そこに絶望を感じあうときはまた希望を感じる、また未来へ歩んでゆこうと決意するところの「私」であります。その私・現実・理想の三点を極として三角

形を巡り、その三角形を幾度も幾度も詩人の心は変遷したときに、詩は次第次第に完成に近づいてゆくのではないかというふうに、私は考えたわけでございます。そうして、勿論、この三点の中において、とらえ方に偏りがあるならば、詩もまた偏りが生じやすいということも言えると思います。理想に執するならば観念的あるいは高踏的という風に言われるような傾向を持たざるを得ないのではないか、あるいは現実^{たまたま}に執するならば平板的な徒言の詩であるというふうに言われやすいような傾向を生じやすいし、私の印象からするならば、それは独善的であったり観念的であると言われる。そしてある時には、周囲の理解から隔絶したような詩になってしまふという危険性もあるというふうにも考えられるわけであります。

勿論、天才は別でありまして、二十年三十年後に理解を期待するならば、いくら何を書いても構わないわけでございますが、一般的にはそういうことはないかと考えているわけでございます。そうして、詩はかかる現実と理想というものをはっきりとらえることによって、詩の持つている普遍性というものを把握し、それを自分の言葉で語ることによって、個性というものを獲得することができると言える。この三点を詩人がお互いにフィルターをかけながら攻めぐり合う、そして深い詩人の琴線、深い心の奥底においてとらえた言葉、これが詩として生きてくるのである。そこに、もし詩人の誠実、そうして眞実を追究することがその詩の中に表現されるならば、詩は詩の深い闇の言葉として読者の深層心理、読者自身が意識せざる世界にまでも到達する

ことができるのではないか。詩人の暗い心から出發したとき、読者の暗い無意識裏の世界まで到達することができるのではないか。このようなときに、詩人は今まで考えていたよりも、もっともつと強い力をもつて發揮することができるのではないかと、私は考えるわけでありませう。

冒頭におきまして、芭蕉が自分の俳句に對しまして、夏炉冬扇のごときものである、こつこつに申したわけであります。積極的な力を持つものではないということ、芭蕉は俳句に對して言っているわけでありませう、芭蕉はその夏炉冬扇たる俳句によつて何をなしたのか。そういうことを考察してみたいと思ふわけでございますが、芭蕉は俳句、連句の一番初めは発句ほつくであります、その発句を独立させて鑑賞させるに耐えるもの

であるということを見つけたとか、あるいは連句の形式を完成したとか、そういうふうにも言われるわけですが、しかしもしそれだけであつたならば、芭蕉は仮に芭蕉でなくしても他に何人かなんびとがそういうものは完成したのではないかと私は考えるわけでございます。

芭蕉が完成したのはいったい何か。それは貴族社会によつて独占されてきた美の世界、その美の世界あるいは美の範疇はんちゆうでも言うべきものを庶民世界の中から拾い上げ、庶民世界の中にあつた美の世界というものを、文字の鑑賞に堪えるようなものに築きあげていったという、そういうところに芭蕉の文学的な功績というものはあるのであつて、単に俳諧形式を完成したというのではないかと思ふわけであります。

詩と言うものはいったどこに発展性を持つているものであるか。詩は結局、詩自身ではなくして。非詩、詩に非^{あら}ざる世界の中に詩を育成することによって詩は発展していくのではないかと思っております。たとえば、黒人音楽が近代・現代音楽として評価されると同じようなことが詩の世界においても、要するに、詩よりも非詩の世界に行くことによって、詩は発展するのではないかと、考えられるわけではございますが、芭蕉は千年にわたる貴族社会によって独占されている、しかも短歌形式によって独占されていた、そういう詩情というものを、芭蕉の言葉を借りて言うならば、「よく見ればなすな花咲く垣根かな」というような、そういう庶民世界をじつと熟視するものの中において改革していく、あるいは、美的世界を革命してゆく。美

的世界における改革者、あるいは革命者として位置づけてよいのではないか。

夏炉冬扇というようなそうした俳句が、これだけの力を持って現在、私たちの文化を支配しているということの中に、俳句の強^{きょうじん}靱な生命というものがあります。先ほど申しましたように、それは詩の進路といっているわけではないわけでありますが、作家の持っている暗い魂の底から生まれた闇の中から生まれたものが読者の闇に達するような、そういう真実性をつかみ、人間の誠実性によってとらえられたもの、そのように考えたときに、詩は一つの力を持つことができるわけでありませぬ。

詩がもし真実によって表現されているならば、その真実は常

に現実と対比されるわけであります。現実とは、勿論、現実の中に眞実は含まれているであろうけれども、現実の多くは歪曲しているわけであります。そうした現実眞実を対置させ、そしてそれを対置したとき、たとえば大きな政治的な枠組み、そういうようなものに対して、一行の詩が対置することができる。人間はボードールの一行にしか過ぎないという言葉にありますように、それだけの力をもっている、そのように私は考えるわけであります。

そうして先ほど言いましたように、詩人が先ほど言った現実・理想・作者この三点を精神の中において迂回させてゆく中において見えてくるもの、それはさまざまであろうと思えます。たとえば哲学的な眞実と虚偽、あるいは宗教的な善悪、あるいは

は芸術的な美醜、こういったようなものがあろうと思えますし、さらに人間の世界、自然の世界、宇宙の世界、あるいは人間の生きている社会の生活の仕組み、政治経済、そういうふうなあらゆるものが見えてくるというふうには考えられます。

勿論、それは個人が立っている立場、個人の性向あるいは性格、そういうようなものによって見えてくるもの。そのものは、それぞれの人によって違うではあろうけれども、それを作家が誠実な力を持って映し出すならば、そこに眞実は生じ、その眞実は現実と対峙たいじすることによって、大いなる力を発揮するのではないかと、私は考えるわけであります。そうして、もしそのように詩が力あると考えるなら、それは、先ほど申したように、いかなるものを歌つても、そこに詩が詩であるならば、詩が強

韌な生命を發揮できると思っているわけでありませう。皆様方は
ご存知であろうと思いますが、たとえば中野重治の歌に『歌』
という詩があります。

「歌」 中野重治

お前は歌うな
お前は赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな
風のささやきや女の髪の毛の匂いを歌うな
すべてのひよわなもの
すべてのうそうそとしたもの
すべての物憂げなものを撥き去れ

すべての風情を殫斥せよ
もっぱら正直のところを
腹の足しになるところを
胸先を突き上げて来るぎりぎりのところを歌え
たたかれることよって弾ねかえる歌を
恥辱の底から勇気をくみ来る歌を
それらの歌々を
咽喉をふくらまして厳しい韻律に歌い上げよ
それらの歌々を
行く行く人々の胸廓にたたきこめ

「お前は歌うな／赤ままの花」やあるいは「とんぼの羽根」で

あります。あるいは「女の髪の毛の匂いを歌うな」と、こういうふうに言っているわけでありませう。

中野重治は自分の立っているその詩の立脚点をどこにとらえているのか。それは赤ままの花をとらえたところの短歌的な叙情に立っていたと考えざるを得ないのであります。しかしながら、その短歌的な叙情の中に立って現実を持っている。現実が苦しい。現実が彼が考えているようなそういう世界とは程遠い。たとえば労働者の困苦というようなものが迫っている、そういう世界でありますし、また中野重治が考えた理想世界の陽炎、かげろうそういう世界と現実を彼は見つめたときに、彼は短歌的な叙情を否定せざるを得ない。しかもそれを歌わなければならぬ。結局、おまえは歌うなというような逆説的な表現の中において

歌い上げているわけでありませう。「お前は歌うな／あかままの花を」、そのあかままの花を題材としながらも、しかも強靱な労働者の歌として生きた歌を中野重治は歌い上げているわけでありませう、それはいかなる大衆にとつてしても作家が、先ほど言った理想・現実・私というような三点の極点の中から立脚点を正確にとらえて対象を把握するならば、それはそれなりの力を発揮することが常にできるということではないかと私は考える。

試みにたとえば、中野重治が今もなお生きていて、同じ題材を同じように歌えといったならば、どのように歌うであろうか。お前は歌え／あかままの花をとんぼの羽根よ蝶々よ、こういうふうには歌うに違いないと私は思うのであります。なんとすれば、

我々の地球は今まさに砂漠化されているというふうに言われております。あるいは核の冬が来るなど、この間テレビにおいて私は見たわけであります。東京砂漠という言葉はこのごろあまり言われなくなっただけでも、そうしたたとえば、あかままの花の咲かないところ、あるいはとんぼの羽のなきところ、これは人間が生きるに耐えないような地球の将来ということを予告しているようにも思われる。こういう環境の中にあるならば、同じ題材を歌っても、また同じ詩人が歌っても、それをまったく逆の立場で歌うであろう、というふうに考えるわけでありませぬ。このことはいかなる対象をとらえても、詩人の精神の中に詩人の誠実があり真実を追究する心さえあるならば、いかなるものをもつてしても価値あるものにあらしめることができる

いうふうな考え方があります。

私は今年の夏、大変苦勞いたしましたして『青年の環』という小説を読みました。野間宏の小説でありまして、岩波文庫八百五十冊五冊の大河小説であります。私は夏休みのはじめに読み始めまして、これでもって全部夏休みを取られたらかなわいなと思っただけでありますけれども、ともかく読み通したわけがあります。その小説を読んでいる方もあろうかと思いますが、ちよつとその話をしてみたいと思います。

二人の青年が主人公になっております。一人は矢花正行と申しまして、心の中に理想を抱いております。作家はその矢花正行の中には宇宙鳥、精神において彼は宇宙鳥を主張させているというふう言っているわけでありませぬ、その宇宙鳥を主張

させている理想を抱くがゆえに、彼は大阪地区の同和部落問題に取り組みまして、その虐げられた最低の生活をしている人の中に、人間として最も信頼に足りる最も優しい瞳、優しい言葉を発見し、彼はその同和地区の人たちの生活向上のために奮闘するわけであります。一九三〇年代の年代から推して、小説はそこまで言っているわけではありませんけれども、結局彼は戦争反対に行かざるを得ないということは、読者が予想するところであります。

もう一人の青年は大道出泉と申しまして、これは矢花正行の学友でありまして左翼運動に関係していたらしいのですけれども挫折しているわけです。彼は梅毒を患っている。彼は自分が梅毒で患っているということを周囲から秘し隠そうとするわけ

でありませんが、ある時同病の患者から示唆される。梅毒は決して恥ずべきものではない。それはたとえば、林檎なら林檎が自然の中に腐敗するように腐敗するに過ぎないのだ。自然的な現象であるというふうに示唆され、その中に心を安住するようになるわけでありますが、彼は彼自身の中に腐敗の根を持っているがゆえに、自分の父親の中に人間の汚穢おえというものを見つめざるを得なかったわけです。汚穢とは穢けがれであり、人為的な穢れである。そうして彼は彼自身が穢れの根を持っているがゆえに、そうした汚穢、汚れ、人間の汚れ穢れというものを追及することによって、最後は殺人を犯して死んでしまうわけでありますけれども、この二人の立場というものはまったく相異なっております。

一方は理想の中にいるがゆえに同和地区にこもり、一方は腐敗の底にあるがゆえに、かえって人間の汚穢の世界というものを追求することでありますが、二人のそういう立場の相違を乗り越えて真実を追究するがゆえに、二人はある時点において友情を交叉するわけでありまして、そこに青年の輪は完結するというような小説であります。これは一方は理想に生きながら、ともに真実を追究するというようなことにおいて軌を一にするというような、そういう小説ではないかというふうに考えたわけであります。

もう一つ同じようなことを挙げてみたいと思います。これは今年の七月頃の毎日新聞の短歌俳句欄に出てきたことを受け売りするだけのことであります。その短歌俳句欄の小文の中に

このようなことがありました。近藤芳美と宮柊二、二人の歌人の比較であります。近藤芳美、それから宮柊二、この二人の昭和二十三年の代表的な作品を挙げて二人の相違を語っているわけであります。近藤芳美の歌は

世を愛し死相の中に守り生きて今こそ戦争を憎む心よ

とこういうふうに歌い上げているわけであります。「世を愛し死相」とは戦争の中の死相でありましょう。そのような死相の中を「守り生きて今こそ戦争を憎む心よ」というふうに歌い上げていくわけでありますが、近藤芳美はそうした戦後の状況を静視し状況を乗り越えて、そして戦い抜こうというような歌

を一本調子の中において、男性的に力強く歌い上げているわけでありませんが、それと対比された宮柊二の歌は

一本の蠟燃やしつつ妻もあの暗き泉を聞くごとくゐる

というような歌でありまして、宮柊二の場合には人間は弱者である。弱者たる私、それは一本の蠟を見つめるような、一本の蠟のともし火を見つめるような生命であるというように意識しつつ、暗き泉を聞くごとくいるというわけでありまして、泉は希望であるかもしれませんが、それは昭和二十三年という社会状況の中においてわずかに聞き取れる泉の声であります、その泉を聞き取ることによって、いかに自分が抵抗の中におい

て抵抗者として生きていくかということ深く考えているが如きであります。

一方は人間のもっている男性的な力強い歌の中において状況に抵抗していこうとし、一方は自分は弱者である、人間というのは結局弱者である。そういう弱者の世界にあっても、なお、状況に対してかく戦わねばならぬということとを歌の中には歌っていないけれども、それをひそかに考えているという姿勢は十分に読み取ることが出来るわけでありまして、この二人の歌人の立場というのは、先ほど申し上げました、たとえば矢花正行、自分の中に理想を抱くがゆえに同和地区に赴く^{おもむ}というように、そういう矢花正行と近藤芳美の立場というものは質を同じくし、大道出泉は、これは梅毒患者でありますから、宮柊二と当

てるということ、ちよつと困るかもしれないのですけれども、立場の上から言つたならば、要するに、人生の最低の中にあつて、なお理想を仰きようぼう望し真実を求め、人間の持つてゐる尊厳というものを掲げて生きていくようなことにおいて、全く最終的な結びつきにおいては同一性ではないかということでありま

す。詩は先ほど申しましたように、いかなる対象を与えられましても、そこに人間がもつてゐる誠実があり、そして真実を追究する心があれば、それは詩として生きていくことではないかと私は申したわけでございますが、またそれぞれの立場、大願・理想の中にある、あるいは現実の最低の中に生きてゐる、そういうことによつて歌われたものが、その歌われた立脚点によつ

て価値を評価されるものではない。いかなる立場、いかなるところにあつても、詩が詩である限りそこに人間の誠実があり真実がある限り、詩は詩としての価値を十分持つことができるのではないかというふうに私は考へてゐるわけでありま

す。おまえの立場はどちらにあるかといったら、私は梅毒患者の方にあるわけでございます。人生の最低の中に生きて、そして何事か達成したいと思つてゐるといふようなことでありまして、このようなこと全体を幸文学歴史同好会で、全体を話そうとしたわけではないのでありますけれども、それに肉をつけ皮をつけてお話したわけでございます。

私は、昭和三十七年、中学校に在職中に初めて『寒菊』なる

詩集を作ったのでございまして、ようやくにして私の詩集になるわけです。この詩集はあまりここに持ち出すような詩集ではございまして、言ってみれば恋愛詩集とでも言うようなもので、恋愛も失恋集とでも言うようなものであります。私はある女性と恋愛して三か月ぐらい恋愛期間をおいてすぐ失恋しまして、そして苦しんだということでありまして、私のような人間でございますから、勿論、プラトニックラブであったわけでございますが、ともかく私はそのことに苦しみまして、どうにかしたいと思ってもなかなか立ち上がれなかつたのでございまして。そういう機会において、私は日記のごとく詩のごとくなんだかわけの分からないものを書いていたわけでございますが、ある日、それを読み直してみましたら、ああこれは発表に値す

るのだというふうに錯覚してしまつたわけでございます。

錯覚したのではございましてけれども、この詩を発表することによって、私は私の精神を洗い取ることができるのではないかと、というふうに考えたわけでございます。これは私が私小説の作家、自己暴露というふうなそういう私小説の世界に影響されたのではないかというふうにも思いますし、また直接には島崎藤村の『新生』というような小説に影響されたのではないか。私の作品を強いて比較しているわけではございませんが、ともかく、島崎藤村が姪めいの節子という女性と恋をしてパリに逃げて行く、そして最終的には恋愛を新聞小説として発表することをした。そしてそれに対するいろいろな誹ひ謗ぼうはあつたわけでありましてけれども、ともかく自己の恋愛を新聞小説として発表するこ

とによって、藤村は自分の新生を勝ち得たと、こういうふうなことであります。

これも藤村に謝ろうと思ったほどのことではないのではありますけれども、とにかく、そういうふうな気持ちになって発表してしまったのが誤りであったわけでございますが、結局、発表してしまったわけでございます。それは藤村の影響であるとして私が考えるのは、その頃、私はよく藤村の言葉をつぶやいていたのでございます。

「私のようなものでもどうにかして生きたい」

これは藤村の小説『春』の一番最後に出てくるところの主人

公のつぶやきであったわけですが、私のようなものでもどうにかして生きたいというその願い、それがこういったような詩集の発刊になってしまったと思うわけですが、これは昭和三十七年であります。

とにかく発表してしまったわけですが、私小説の構成を真似て、恋を得て、恋を失って、懊惱おうれうして、だんだん恋を離れていくというような小説的な構成を、私は心がけたわけであります。その構成の中において、ぶつぶつぶつ一人ずつぶやくというふうな、そういう詩がたくさん載っている。ことに一番最後のほうはもう恋から離れて、ただ単なる孤独者がつぶやくような、そういう詩篇を載せたわけでございますが、それらの詩篇は、それより二年ほど前、中学の美術の先生と一緒に、

ここにある『破線』という雑誌であります。この同人雑誌を友人と発行していたわけであり。これは世の中によく三号雑誌なるものがあるわけですが、これは三号雑誌ではございません。五号雑誌でございます。五十歩百歩ではあるけれども、ともかく五号まで二人でもって共同して作った雑誌でございます。その中の詩篇を本来は『寒菊』の詩題とは全くかけ離れていたのではありませんが、それを拝借することによって、一部を構成したわけでございます。

勿論、盛大な反響があればよろしいわけでございますが、なんらの反響もなく、まさに世の中の底に埋もれるどころか、消えてしまっているであろうとは思いますが、大変恥ずかしいと思っている次第であります。これは昭和三十七年でございます。

で、その後十何年間か、私は詩集というものを作ることができなかった。詩を書くことはできないし、句を作ることはできない。よく私は教員でありますから子供たちに作文を、この頃はあまり書かせないんですが、昔はよく書かせまして、書かせようとする、「先生、何も書くことはないよ」と、こういうふうに言われるわけでありますが、その何も書くことがないよ、という状況がずっと続いてしまったわけでございます。

いつか俺の中に詩は生まれるに違いないというふうな考えていたのではあります。思っても思っても生まれなかったのではありません、その間、私はもう詩はだめなのかもしれないなあとというような気を持ちつつ、書きたいなあと思っていたわけであり。ただその間、私は先ほども紹介がありましたけれど

も、『渋柿』という俳句の雑誌をやっておりましたので、俳句を作ってはいたわけでございます。ちっとも詩を作らないわけでありませう。

なぜかというところ、俳句とは私の詩と詩の人生を繋ぐところの単なる糸に過ぎないというようなことを、私が傲慢にも考えていたわけでございまして、あまり俳句を熱心に作らないがゆえに、俳句では感動句といひまして、多くの場合六句七句載せるわけでありませうが、私の場合いつも一句か二句、俳句の世界では一句組だとか二句組だとか言つて、軽蔑しているわけでありませうが、軽蔑に甘んじてそれでもやめなかつたところに、私の良いところがあつたと思つたわけでございますが、とにかく、俳句は続けていたわけでございます。

昭和四十三年になりました、歴史的な年ではないわけでございますが、私にとっては不惑の年を迎えてしまつたわけでございます。皆様方ご承知のとおり不惑の年とは、我十有五にして学に志し、三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順う、七十にして心の欲するところに従ひて矩を踰えず、ということでございます。四十にして孔子は惑わず、何も惑わなかつた。この道をまっすぐ行けば、天命を知ることができるといふことを確信することができた。そういうふうに行つてゐるわけでありませう。ということは、この道をまっすぐに行けば、今の言葉で言へば、真理を獲得できるといふことを信じたということでありませう。しかるがゆえに、惑わず、不惑の年であつたわけでありませうが、私はその不惑の

年を迎えながら、空白の精神をもって、わずかに俳句を作ることはしていたけれども、なんとも言いようのないのんびん暮らしとした生活が続いたわけでございます。

その間に、結婚したり、子供ができたり、あるいは現在住んでいる住宅を……（テープ中断）……

『鷹』という個人誌があります。私はそのとき考えたわけでありませう。人は石の上にも三年といひまして、三年間努力・我慢すれば物事は成就するというわけでございます。どうも私にはそれほど才能があるとは思っていない。愚物である。人が石の上に三年座っているならば、どうも私は十年座っていなければ駄目のような気がしたわけでございます。そうして私は考えました。一年間に二部、十年間続けければ二十部発行することがで

きる。一部について二十篇の詩を作るなら、最後にはとにかく詩は四百を数えることができるはずだ。その中から五十篇の詩を選び出せば、どうにかこうにか詩集は作れるのではないかと考えたわけでございます。そのように考えて詩を作ろうと思ったわけでございます。ところが詩集というものは私には遠すぎた。詩を書くことができないわけです。

結局どのように考えたか。詩は生まれるものであると誰もが言う。ところが、生まれる生まれると思っているうちに、ずんずんずんずん年月が経たっていくというところでございまして、生まれるはずがないわけでありませう。処女懐胎しよじよかいたいなどということがあります。ありますが、あれは嘘でございます。要するに、生むべくして生もうとしなければ生まれないのでありまして、私はともかく

生み出してしまおうと思つたわけでございます。私の中に詩の根がないならば、人の根を借りてくればいいじゃないか。私が題材を見つけてしまえばいいじゃないか。何でも構いやしない。勝手なことだ。こう思つたわけでございます。しかし、そういうふうには詩を発表しても、これは無視されるかもしれないといふことは、私が知つていたわけでございます。あるいは、これを発表することによつて、人に嘲罵ちやうばあるいは叱責しつせき、そういう言葉を親切な人は浴びせかけてくれるかもしれないけれども、そうした人による無視、あるいは、叱責・嘲罵、そういうものを鞭むちとすることによつてのみ、私は私の中に詩が生まれてくる可能性がわずかに存在する、といふふうにも考えたわけでございます。

います。とにかく、そのような気持ちの下もとに、私はこの『鷹』なる個人誌を作つていったわけであります。

この『鷹』なる個人誌は、一九六九年二月に作り始め、創刊号といつてもなんですけれども、ともかく創刊号を作り上げました。一九七七年十一月によつて二十部まで出し、私は自分で自分に約束した、自己内部における自律性を尊重して、とにかく作つたわけです。その間の歳月が八年九ヵ月ということでありまして、これは一年に三回発行したことがあつたということでございます。こうして二十部まで到達してみますと、さて私はそれによつて詩集を作ろうと考えたわけでありまして、その詩集は『氷湖』という詩集でございますが、それが出来上がったのが一九七八年で、その前の『寒菊』という詩

集を作りましたのが一九六二年でありますから、およそ十六年間の長き沈黙でありますか。別に沈黙していたわけではなく、しゃべりたかっただのであります。しゃべれなかつたわけでもあります。そういう歳月を経て、ようやくにして私の第二詩集なるものは出来上がってきたわけでございます。

ところで、私はその『氷湖』なる詩集を作るに当たって、私の十年にわたる二十部の個人誌をもう一度検討してみたわけでございますが、どうにもこうにも自分で読んで耐えられない作品が、たくさん詰まっているということにあきれてしまいなながらも、結局それは当然のことと感じざるを得なかつたわけでございます。ということは、結局、指針のないところで詩を作ったということ、形式はとにかく、詩の形式らしきものになっ

ているけれども、結局作品としてはなんら価値のないものといわざるを得なかつた、ということであろうかと思えます。

もしも採るべきものがあつたならば、『鷹』なる個人詩の後期の中に、あつたように私は考えられるわけでございますが、それには私が自覚的にそういうふうにつけていったということがございます。ということは、私の中において詩人なくして詩を作っている自覚は元々あつたわけでございます。そして、私は私について考えたわけであります。

私は一教員に過ぎないし、一小市民に過ぎないし、全く平凡な何の特徴もない人間であるということを、自覚せざるを得なかつたわけでございます。私には何の特徴もないということでございます。どうか特徴を出そうと思つても、どこにも特徴

がない。しかしながら、私は私でなくて、かつて、今も俳句をやっているという事に気がついたわけでございます。俳句の根、私はしばしば句を作っているということ、俳句も作っていますと言うと、俳句なんかやめちやえと、みんなそんなことを言われるわけです。短歌も作ってますと言うと、短歌なんかやめなさい。こう言われちゃうわけであります。詩と俳句、現在並立させているわけでございますが、ともかく私の中には俳句の根というものがあるから、それを詩の中に生かしていったらどうであろうかということ、私はある時点から意識して、詩の芸術を語ってゆくようにもなったわけであります。

俳句について私か云々する^{うんぬん}ことは、僭越なんでございますが、俳句はたとえば、いろいろな特徴がございます。俳句は五七五、

短詩でございます。圧縮し、圧縮し、圧縮し、そして、省略・省略・省略を重ねた無音と表現と紙一重^{かみひとえ}の中でもって、わずかに成立するような、そうした短詩的な世界でございます。俳句に対して自由韻律の俳人たちは、俳句の季題の言葉は要らないというふうに言うわけでございますが、私は俳句の場合に伝統的な立場に立っております。

要するに、季題というものによって、それは単なる季題ではなく広く大きな広がり、大きな自然であり、果てしなき宇宙を感じさせるような、そういう広がりとしての働きを持っている。そうした季題、そしてそれはある時、私なら私の生命の象徴としてあるところの季題でもあるわけであります。そうして季題というような特徴もございますし、あるいは、俳句によって自

然を見つめる目を鋭くすることができるとあります。

私は都市に育ったわけであり、しかし昔のことではありませんから、自然の山野を駆け巡ったということもあり、すけれども、それでも自然の認識が浅い。しかし、その認識を担になつてくれるものとして、歳時記というようなものがあるわけですが、ますます。さらに俳句について考えるなら、俳句を五七五というように一本に歌い上げる。一本に歌い上げることによって、寸鉄人を殺すが如き鋭い言葉をもって、人に衝撃を与えるような、そういう表現もできる。あるいは、俳句には取り合わせの技法というものがある。二つのものを取り合わせる。関係ないものを取り合わせる。たとえば夏草やという夏草と、つわものどもが夢の跡という、これは直接には関係ないわけですが、

その直接的に関係ないものを結びつけることによって、夏草でもない、つわものどもが夢でもない、そうしたこの句の場合ならば、芭蕉が持っている感覚、その歴史的感覚から来るところの広がりというようなものを、果てしなく感じさせるような詩、あるいは、俳句の世界というものがあるわけですが、

これはたとえば、先ほどの話の中に西脇順三郎さんの話が出てきましたけれども、現代詩の中において、相異なるもの、距離が離れていけば離れているもの、その離れているものを、共通項をもって結びつけたときに、詩は爆発的な力を発揮することができ、などということが、西脇順三郎は確か詩論の中で申していたわけですが、そういうような力が俳句の中にある。その俳句の心、あるいは俳句の根、それを私は現代詩

の中において生かしていったらどうであろうかというように考えたわけでございます。

そうして、『鷹』の後期の作品はそういったような意図の下に作った作品が多かったわけですが、そういうようなものを主にして詩集を作り上げたわけでもあります。そうしてその結果としまして、私は今になって読み返してみると、『氷湖』なる作品の対象は、自然であったり、動物だったり、昆虫であったり、そういう作品ばかりになってしまったような気がします。もっと社会的な批判とかそういうものを、積極的に取り入れればいいのと思われた方がおられたのではないかなあというふうに考えられる。あるいはまた、私はあまりにも凝縮した表現をしてしまったため、たとえば、蝶が死ぬということは、

私自身が死ぬということを表示したつもりなのに、蝶が死んでどうなったのというふうに言われると、ギャップでございます。そのような欠陥は持っていたわけでございますが、それでも盛大な拍手のうちに迎えられたならよかったですけれども、そうは問屋が卸さないわけでございます。ともかくも埋もれた作品になってしまったと考えるわけでもないわけでございます。

なお、『氷湖』の「あとがき」に、私は私に課した約束だけは果たしたというふうに書いておいたわけでございます。私が私に課した約束を果たしたわけですから、あとどのようにな自分を発展させるのか、それはその時点では毛頭分からなかった。結局、私はタラタラタラタラ、要するに『鷹』なる個人誌を發

行し続けていったわけでありませぬ。そして二十七号まで作り上げたわけでありませぬ。

ところで、この『鷹』という至らぬ雑誌であります、発刊の頃は二万から三万ぐらいで、百五十部作れたわけでございますが、二十七号までできてしましますと、もう大体にして八万円九万円というような金額が、百部においてかかるようになってしまつて、これを私がみんな郵送するわけでございます。大概返事はくれませぬ。ともかく、郵送すると郵便代がかかるというところでお金がかかる、ということ、なんとなく発行することがいやになつてきたということがありまして、そうして二十八号を発行しようと思つて、原稿用紙に向かつているうちに、私はまたも錯覚してしまつたわけでございます。

このようなどころで発行しなくても、充分詩集にして鑑賞に堪えうる作品であるというふうな考へてしまつたわけでございます。そこで十篇を集めまして、それからその次の『燦爛の天』さんらんという詩集の話なのですけれども、それからあと十篇は私の母が死にまして、私の気持ちでは追悼号ついでうというような気持ちでもつて、母の死を二十篇にわたつて歌い上げたものが一冊あつたわけでありませぬ。その中から十篇採り上げよう。そうすると二十篇になるから、あと三十篇だから二十七の中から採り上げればいい。足りなかつたら前の中から採り上げればいい。そうすれば詩集ができるなど目算してしまつて、発行してしまつたのが誤りであつたわけでございますが、『燦爛の天』という派手な名前をつけまして、まあ燦爛ではなかつたわけでございます。

とにかく、そういう詩集を発行してしまつたわけでございます。この詩集の内容は、先ほど言いましたような内容を、たとえば『氷湖』があまりにも自然に偏りすぎるといふことでもつて、人為的な人間の世界、あるいは抵抗の姿勢といふようなものを、かすかに見えるような作品を入れてみたわけでございます。ともかく『燦爛の天』というものを発行いたしましたして、これが一九八〇年であつたわけであります。

その頃、かわさき詩人会議の仲間に入れてもらつていたわけでございますが、その年の八月二十五日に出版記念会なるものを盛大にして、かつ華々しくやっていたわけでございます。そのときに私は、鼠径部そけいぶに痛みを感じていたわけでございます。これは化膿性股関節炎という、後になって分かつたわけ

でございますが、八月の二十五日とにかく一杯飲んで帰つて、二十七日八日辺りになると、痛いから学校に行けないと困るからというので、大学病院に行つたわけで、その時は大したことにはなかつたのですが、八月三十日になりますと動きがとれないわけでございます。全然動けないわけです。学校にも行けなかつたということでございます。

結局、原因は分からぬままに、十月二日辺りに入院いたしました。結局その病院では分らなかつたわけでありませうけれども、化膿性股関節炎ということ、膿うみが増えて血管に入ると敗血症になるということ、自分ではその当時股関節炎の手術をしたと思つていたのですけれども、実際には敗血症の手術をしたということ、ともかく整形外科で手術したのですけれども、た

だちに内科病棟に移って内科的な治療をし、また整形に帰って治療をするというようなことを続けまして、ようやくにして退院したのが翌年の三月であったわけであります。退院とはいいながら、一本の杖をヨチヨチつきながら、まるで子供のような格好をして退院したわけであります。

その間、病院において私は考えたわけであります。大体、私は詩人というようなものを考えるならば、詩人というのは大体においてマイナスのカードを天から与えられているのではないかとというような考え方を、その当時から持っていたわけでございます。そのマイナスのカードをプラスのカードに転化できる生命の力を持っている者のみが、詩人たる名前に値するのだというふうに考えていたわけでありますが、いざ私が生死の境を

彷徨するような病気になりました、今こそ私が自分の与えられたマイナスのカードをプラスの形にしてお返し申し上げなければ、私には詩を作る資格がないなあというふうに考えたわけでございます。ということ、私が私の病気の状態というものを正視し、客観的に把握することによって、病気そのものを詩の題材として描き切ることができるならば、わずかに私は詩の世界に旗揚げすることができる人間になることができるなあ、と考えていたわけでございますが、その時に同時に、私が教育の問題、要するに、学校に行くことができないう病床にあることを考えて、今まで教師生活であるとか教育とか、それは詩の題材にならないのではないかとというふうな考え方を持っていたわけでございますが、今はそんなことは言っていられないと

いうことで、定時制高校の生活を対象にして詩を作るということを考えて作り上げたのが、『定時制高校』という詩集であったわけでございます。この詩集については、少しはお褒め（ほ）の言葉を下さる方がございましたが、どうもそのお褒め（ほ）の言葉なるものが私には気に食わなかったわけでございます。

要するに、彼は定時制高校なるものを題材にしている、それは良い。私はかつて『氷湖』なるものを発行したときに、この詩集は昭森社から発行したから良い、昭森社・昭森社というふうなお褒め（ほ）の言葉をいただいて、詩の内容はいつも褒められない、そういうような手紙をもらったことが、数人の女性からありましたけれども、今度は私の詩の内容ではなくして、定時制高校、特殊な学校・環境というものを素材にしたということに

ついて褒められたけれども、私の詩は褒められなかったのではないかなあと思ったわけでございます。

同じことが次の『川崎』というものに出てきているわけであります。私は松葉杖をつけて登校したわけでありませけれども、その間、川崎を題材として『川崎』という詩集を作ったわけがありますけれども、お褒め（ほ）の言葉としていただいたのは、川崎にはこんな良いところがあったのですか、私はかつて川崎に住んだことがある、などということ、なかなか私の意図するとは通らなかつたということ、私の力が足りなかつたという風には思っていたわけでございます。あと『修羅』というような詩集を発行して、詩的な生命はそれで終わるのか終わらないのか、よく分からないのですけれども、現時点に至っているわ

けでございます。

時間ですからまとめ上げたいと思うわけでありませうけれども、詩とは一体何であるか、これは誰も言われて答えることができない。むしろ、詩とは自分自身一人一人が書くことによつて、自分の内面から先駆けるかしらうがないというように考へざるを得ないわけでございますが、私はこの会合に当たつて、何か格好いいことが言えないかなあという考へたわけでありませうが、詩とは結局好奇心ではないかと思つてあります。

私は先ほど申しましたように、人格的、あるいは人間的な偏りがありますので、その偏りの中からとらえたところの好奇心ではあるけれども、とにかく自分の足元、その足元から出発して、地平線・水平線はるか彼方、宇宙に至るまでのそれらをと

らえようとするような好奇心は、本当は出来ないわけですからけれども、そういう好奇心が詩ではないかというふうにも考へるわけでございます。

しかしながら、好奇心だけでは詩にならないのでありまして、その好奇心を一つのシャベルのように考へまして、大きなシャベル、小さなシャベル、そのシャベルをもつて、私なら私の内面を掘り下げてゆく。そして、その中から掘り下げたものをこの地上に生かしたとき、それは私のような人間が掘り出したものは、泥土のような如きものでございませうが、それが詩ではないかと考へるわけでございます。

そして、私たち人間は全て、私たちの心は奈落ならくを持っていると考へるわけです。奈落である。要するに、底なし沼である。

そういうことは、いかなる大きなシャベルをもってしても、内面を掘り下げることができないのである。その掘り下げ、掘り下げた結果としての泥土の如きもの、あるいは、ある時には、宝石の如きもの、私の場合はあまりないわけでございますが、そうしたものを詩といえるのではないかなあと、今考えているわけでございます。そうして、そういうことをすることによって、自己内面を掘り下げてゆく。結局、その時そのものによって、自己自身の存在を確立してゆく。詩とは、ただ単にそれだけのものではないだろうか。私は詩について、そのように考えるわけでございますので、詩が売れなくてもいいやいいやというふうに考えて、無駄なことを、他人から見ると全く無駄なことをやっているわけでございます。それでは、長い間ありがと

うございました。

私の青春



(大学在学の頃)

私^{わたくし}の青春時代は、まさに戦中戦後であり、その混乱の中に
終始した生活は、私から普通言われる青春を根こそぎ奪い取っ
てしまったものではないかとさえ思われる。

戦前戦中の私、戦後の私、中学校教員時代の私、定時制高校
教員時代の私と、私は私の生活をいくつかの節目をもって考え
るわけだが、しかし、これを大まかに分ければ、戦争中と戦後
であろう。

苦難に満ちたと思われる生活の中から、私はどれだけ変わっ
たのであろうか。本当は少しも変わらないのかもしれないが、
少なくとも、少年時代の温和な私から、焼^{しょうちゆう}酎^{ちゆう}をあおって気炎
を上げ、ある時は口論し、ある時は喧嘩^{けんか}し、ある時は路地に寝

そべっていたというような、戦後の一時期の私の生活は、想像
することができないように思われる。

(このリンクをクリックすると、生前の肉声が再生されます。)

略年譜

昭和三年五月十三日 川崎市南河原（現、幸区南幸町）に生ま
れる。父勝吉^{かつきち}。母こと。三男。

昭和十九年三月 神奈川県立神奈川工業学校三年を修了。（十
五歳）

昭和十九年四月 海軍甲種飛行予科練習生として奈良海軍航空
隊に入隊

昭和二十年 終戦 復員

昭和二十一年 日産重工業株式会社入社

昭和二十二年 日産重工業青年学校入学

昭和二十三年三月 青年学校卒業、日産重工業退社

昭和二十三年四月 日本大学高等師範部国語科入学

昭和二十六年三月 同学卒業

昭和二十六年四月 川崎市立中学校教諭となる。この年以降、市内の臨港中学や西中原中学で国語を教える。

昭和三十七年二月 第一詩集『寒菊』（五月出版）発表

昭和三十七年四月 小泉孝子と結婚

昭和四十年四月 川崎市立工業高等学校定時制の教諭となる。

昭和四十四年二月 雑誌『鷹』第一号発刊

昭和五十二年十一月 雑誌『鷹』第二十号

昭和五十三年七月 詩集『氷湖』（昭森社）

昭和五十四年 雑誌『鷹』第二十七号発行、以降廃刊。

昭和五十五年一月 詩集『燦爛の天』（昭森社）

昭和五十五年八月 出版記念会、化膿性股関節炎発病。以降入退院を繰り返す。

昭和五十七年九月 詩集『定時制高校』（昭森社）

昭和五十八年三月 詩集『川崎』（昭森社）

昭和五十九年四月 詩集『修羅』（昭森社）

昭和六十年四月 詩集『彫刻』（昭森社）

昭和六十年十二月 詩集『曠野』（芸風書院）

昭和六十一年七月 詩集『銀猫』（昭森社）

昭和六十二年四月 句集『高野邦夫句集』（芸風書院）

昭和六十二年十二月 詩集『日常』（昭森社）

平成元年十二月 詩集「川崎（ラ・シテ・イデアル）」（教育企画出版）

平成三年七月 詩集『短日』（吟遊社）
平成五年一月 詩集『峡谷』（吟遊社）
平成六年九月 詩集『鷹』（吟遊社）
平成七年八月 詩集『敗亡記』（吟遊社）
平成九年四月十四日 敗血症により、横浜市青葉区の昭和医大藤が丘病院で他界（行年六十八歳）。四十九日の法要の後、川崎市宮前区の初香山本遠寺ほんのんじに埋葬。法名は「至徳院法教日邦信士」
平成十年四月 詩集『廢園』（遺作）（吟遊社）

あとがき

高野邦夫は昭和三年（一九二八）、川崎市南河原（現、幸区南幸町）で、勝吉、ことの三男として生まれた。小学校六年の時、リューマチを患っていた父を失う。一人の兄は召集を受け、自身も予科練に志願し、戦地に送られる前に終戦を迎えた。

復員後、自動車の工員などを経て、日本大学に入学。卒業後は川崎市内の中学校、のちに定時制高校で国語の教諭を務めた。日本詩人クラブ、俳人協会の会員であり、仕事の合間に原稿用紙に向かい、詩作に励んでいる姿が、今も記憶に残っている。著書については、略年譜に書かれているとおりである。

本書に掲載した講演「詩と人生 蝶と猫」は、昭和五十九年

十月十四日に、川崎市中原区の区役所内の一室で行われた。当時大学生だった私も、手伝いに駆けつけたのを記憶している。これが文字の形として残ったのは、私の従兄である故・山川清秀氏が録音テープから文字を起こしてくれたからである。冒頭の凡例と略年譜も、山川氏が作成したものに、若干手を加えたものである。気がついた範囲で誤りを正し、読みやすいように読点を施したり、あまりに長い段落は改行したりした。また、一部の語はひらがなに改めた。

父は浪漫主義の詩人のような性格の持ち主だった。疾風怒濤しつぷうどとうという、傍目はためにはロマンチックに聞こえるが、機嫌がよい時はいいものの、普段は気難しく、怒り出すと手がつけられなかった。感じやすさのため、酒を飲むではますます怒りを募らせ

た。そんな父のことを、子供の頃は苦手に思っていたのであるが、父の気持ちが幾分かは理解できるようになったのは、高校生の頃、文学に心引かれるようになってからだった。

その反面、対抗心というものがあつたせいで、父がくれた詩集をきちんと読み通したのは、父が亡くなってからのことだった。私よりも若い頃の父が、これほど純情だったのかと驚いたものである。詩集のすべてを読み通した後、私の好みで選んだ詩を『高野邦夫詩撰』と題してまとめ、インターネットのブログ (<http://takanotsushi.sesaa.net/>) で公開している。

父を文学に向かわせたのは、軍国少年だった頃の価値観の崩壊である。空白の精神を満たすべく向かったのが、詩の創作だった。この講演で述べているように、一億玉碎に向かわせた軍

国主義に、父は生涯怒りを覚え続けた。多くの若者の命を戦場で散らせた「教育勅語」にも、反感を抱き続けたのである。「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」は「ひとたび戦争が起これば、正義に基づく勇気で公に奉仕し、天地とともに永遠に続く皇室の運命をお助けするべきだ」というような意味で、この部分は、実は『隋書・煬帝記』の記述に基づくもので、古代中国の思想に則った言葉なのである。

「一旦緩急アレハ」の部分は、平安時代の古典文法なら仮定条件で「一旦緩急アラバ」となるところだが、漢文の読み下しが行われた江戸時代には、現代語のように仮定条件が古典文法の已然形（あれば）に移行しつつあったという。現代語で「春になれば桜が咲く」という言い回しも、「なれば」の部分は仮定条件ではなく、確定条件なのである。これも古典文法の已然形が、かつて確定条件の意味になっていた名残だろう。

父の文学観については、講演の文章を読んでいただけならばかと思う。詩人は無頼漢であり、マイナスをプラスに転じることができると存在だと考えていた父も、化膿性股関節炎を発病した後は、入退院を繰り返す闘病生活となった。最後の入院をした頃にはさすがに応えたと見えて、「我に艱難辛苦を与え給え」と言っていたら、こんなふうになってしまったよ」とこぼしていた。まさに苦行者としか思えない姿だった。

ここで、挿入した写真について説明を加えておこう。冒頭に掲げられた一枚目は、父が新婚旅行で紀伊半島を巡ったときに、

恐らく母によって撮影されたものである。二枚目の写真は、父の書齋に飾られている皿である。父は詩と俳句の創作以外に、油絵や墨絵、版画や彫刻なども手がけていた。書かれた文字は変体がなを含むものであり、変体がなは万葉がなの草書体であるわけだから、あえて漢字に戻してみると、「旅果つる 日の以理いりや 花野の雲」となる。三枚目は詩集『峡谷』の自身による装画で、谷間に現れた浮遊する謎の存在は、ルドンの眼球を思わせる。

講演に続いて掲げた「私わたくしの青春」は、父の書齋に残されたテープの一部を私が起こしたものである。挿入した写真は、恐らく日本大学在学時のもので、青春のまった中にいたらしいことは、純情な顔と光る目、飲んで皺くちやにされたらしい学

帽からうかがえる。なお、今回は電子書籍の特長を生かして、その部分の録音も収録した。

二〇一七年三月六日

高野敦志